

倉吉発展の基盤となる流通を支えた やばせ 八橋往来



鳥取県倉吉市

八橋往来は、伯耆国東部の中心であった倉吉と山陰道の八橋を結ぶ4里（約16km）の道で、倉吉から米子方面への最短ルートでした。近辺に伯耆国府・国分寺跡があることから、古くからの街道であったことがうかがえますし、江戸後期、日本地図を作った伊能忠敬^{いのうただか}たちもこの道を歩いて測量を行ったとの記録があり、重きをなす往来だったのでしょう。

八橋は月山富田城の尼子氏が毛利氏に敗れた後は、杉原—南条—中村—池田それぞれが短期間で城主となりました。最終的に池田家の家老であった津田元匡が陣屋を構え、明治まで津田氏が自分手政治を行いました。このため、八橋の町並みは道が直角に曲がる鍵の手や、家と家の間が狭くなるなど宿場町と陣屋町の特徴が残り、「津田侯殿様街道」の高札がたてられています。

一方、起点となる倉吉は伯耆国の内陸部に位置し、本格的な城下町が形成されるのは天正年間（1573～92）南条氏の頃ですが、関ヶ原の戦いを経て一国一城令で打吹城は廃城となりました。その後、倉吉は城下町から陣屋町へと変わり、交通の便も良いことから商工町・宿場町として発展していきます。

玉川は打吹城の外堀として掘られ、南側に続く本町通りが商業活動の中心で、通りに面して店舗兼住宅の主屋が建ち、背後に中庭、土蔵が並ぶ商家は明治時代から昭和前期に建てられたものです。こうした白漆喰の土蔵の壁、焼杉の黒い腰板、蔵を支える石垣という玉川沿いの土蔵群は、倉吉を代表する景観を創り出しています。

これらの町並みが生み出された背景の一つに、倉吉千刃^{いなこぎ}があります。稲扱^{いなこぎ}千刃は江戸時代に日本の農業生産性を一気に上げた立役者といわれています。なかでも倉吉千刃は日野川流域から産出される良質な印質鋼^{いんしつがね}を原料に、熟練した鍛冶技術と修理システムで評判を高め、全国の8割が「伯州倉吉千刃」といわれるほど、倉吉の名を全国に広めました。多くが倉吉の鍛冶町の鍛冶屋で作られ、八橋往来で全国へ運ばれていきました。

2世紀前の道筋が今に残る八橋往来は、国の「夢街道ルネサンス地区」にも認定されており、歴史的資源を活用しながら町並み保存と活性化へ取り組みが進められています。

■位置図



八橋城下鍵の手跡（鳥取県東伯郡琴浦町）



打吹城の外堀として掘られた玉川
江戸末期から明治にかけて建てられた玉川沿いの土蔵群。石橋は町家の通用門。



国登録有形文化財指定「旧国立第3銀行倉吉支店」
山陰地方に現存する土蔵造り銀行建築の中で最も優れたものとされている。（明治41年建築）



国登録有形文化財指定「豊田家住宅」
主屋は切妻造り、椽瓦葺き、平入、木造2階建てで、倉吉の伝統的な町屋形式を保持。（明治33年建築）



西町の道標
鳥取元標からの距離や長瀬、赤碓、関金などへの里程が刻まれている。